

C—5 明治・大正時代の宮廷を中心とした 女子礼服の被服構成

山形県立米沢女短大 原 のぶ子
○徳永 幾久

1. 明治期は宮中の女子儀礼服が洋装に改正され、政府も対外儀礼のため上流婦人に欧米服を着用させたので当時の礼服は宮中伺候の礼服から一般用の社交服迄宮中服を範とし、欧米の服装を模倣し着用した。その中で西洋及び日本洋装史上特異な存在であった C.1900年(明治33年)～1925年(大正14年)の残存衣裳を一連の形でみる事は極めて少くまたその構成について発表された文献も僅少である。この度原コレクション(C.1900年～1925年間の残存衣裳10点)を公開することにより被服構成上興味深い事実を観察し貴重な資料を得たのでこれを紹介報告すると共に現在の流行の基調となっている C1908～1909年のアンサンブルについて若干の考察を加えて報告する。

2. 実物精査及び復元による比較調査、服装史並びに裁断関係文献参照。

3. 大礼服4着をふくむこの一連のコレクションから、再び長くなることのないフルレングスから脚の露出への変化の様相、芸術運動が被服造形に及ぼす影響、宮廷を中心とした尊厳性表示のための服飾造形技術のあり方など当時の精巧な構成縫製技術と共に察知できたのである。この調査により各々その時代の被服構成の解明に得がたい資料となる特色のあるもので何れもモードを代表する作品であることが分った。又、20世紀の基本的形態を暗示した cut 線をもつアンサンブルも貴重である。今後この貴重な資料の分析に更に研究をすすめてゆきたい。